

## 昭和初期の和風キリスト教会堂について

——奈良基督教会を事例に——

松 波 秀 子  
(技術研究所)

### §1. はじめに

幕末の開国以降に導入された西洋文明のなかで、キリスト教は大きな位置を占め、教会堂や宣教師館、あるいは伝道局が設立した学校や病院などの諸施設は、洋風建築の代表的なものであった。しかし、キリスト教プロテスタント系の一派である日本聖公会には、昭和初期に建てられた、きわめて和風<sup>1)</sup>の色濃い教会堂が4棟現存している。奈良基督教会(奈良市, 昭和5年)、彦根聖愛教会(彦根市, 昭和7年)、上田聖ミカエル及諸天使教会(上田市, 昭和7年)、桃山基督教会(京都市, 昭和12年)である。そして現存しないが、当時その和風意匠が話題になった熊本降臨教会(熊本市, 大正13年)がある。この他カトリック系の教会にも、設計において積極的に和風意匠を用いる意志が反映された事例として、奈良カトリック教会(奈良市, 昭和7年)、片瀬カトリック教会(藤沢市, 昭和14年)が確認されている。

本稿では、奈良基督教会を事例に、次章で述べる和風教会の特異性に着目して、和風意匠を採用した経緯、採用された和風意匠について、ミッション側の資料を中心に検討し、和風キリスト教会堂について考察する。

### §2. 和風キリスト教会堂の特異性

和風の教会堂は、すでに16世紀末にも存在した。鎖国以前、イエズス会宣教師ザビエルらが1549年に来日してから約100年間、特に後半は厳しい弾圧が続く中、キリスト教が日本各地に広まったことはよく知られているが、当時、布教の拠点となったのが南蛮寺とよばれる教会堂と附属施設である。南蛮屏風<sup>2)</sup>に描かれた教会堂は、棟の中央に十字架を載せ

た入母屋(千鳥破風)あるいは方形の瓦葺屋根をかけた和風の外観で、一部には洋風が加味されるものの、基本的には日本建築である。また、布教初期には仏寺を改装したり、板葺の簡素な家屋に十字架を載せて教会としていたが<sup>3)</sup>、盛期には天守閣のような三層の教会堂を建設したことが知られている<sup>4)</sup>。1581年にイエズス会巡察使ヴァリニャーノが著した『日本イエズス会士礼法指針』第七章には日本で修道院や教会堂を建築するにあたっての指針が示されている。日本人の習慣に適合することを基本とし、日本の大工技術による日本建築を想定した上で、建物に関する細々とした規定を示しているが、仏寺は悪魔の堂であるから仏寺のように横長の広い間口とせず、西欧の教会堂と同様に、間口は狭く奥行を深くすべきと正面性を規定している<sup>5)</sup>。上記の南蛮寺も、この記述にほぼ合致している。

それから約2世紀後の幕末に開国となってキリスト教が再来し、その精神は明治の文化に大きな影響を及ぼした。以前のように布教を広めるためにその国の建築様式を採用することはなく、和風の教会堂は建設されなかった。布教初期に既存の日本家屋を借り受けて伝道した事例、主に費用の問題から暫定的に一般的な日本家屋を建設して仮教会堂とした事例はあるが、いずれも積極的に和風建築を採用したわけではなかった。また、寺院の一画にある日本住宅に外国人宣教師が仮住いし説教会を開催するなどの例はあるが、既存の社寺建築の本殿を教会堂とした事例もない。横浜や長崎の開港場では、布教開始まもない頃からすでに本格的な洋風の教会堂が建設されている<sup>6)</sup>。地方における明治期の比較的小規模な木造教会は、和風の手法は散見されるものの、いわゆる擬洋風であって基本的には洋風を志向した意匠である<sup>7)</sup>。

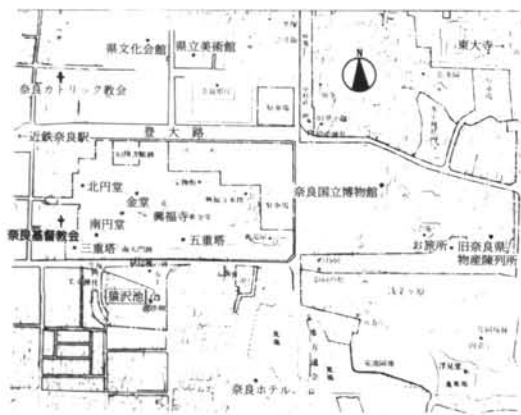
幕末以降のキリスト教には、かつてのカトリック系だけでなくハリストス教会やプロテスタント系の

教派が加わった。特にプロテスタント系ではアメリカの伝道機関（ミッション）によるものが圧倒的に多かった<sup>8)</sup>。彼らのいう『優れた西欧文明＝キリスト教文明』を世界に伝播するという宣教理念は、教派を問わず共通するところであった<sup>9)</sup>。英語教育や医療活動を通じて西欧文明を啓蒙しつつ、外来文化としてのキリスト教の効益を強調し、福音伝達を行う方針をとる教派が多く、キリスト教それ自体が西欧文明の象徴として、知識欲の旺盛な当時の若い日本人の心を惹きつけたのであった。したがってキリスト教伝道の拠点となる教会堂建築も西欧文明を具現するものでなければならなかった。従来の日本に既存する仏教あるいは神道の建築とは明らかに異なる、本格的な西洋建築を建てることはきわめて自然であった。事実、明治後半以降、次第に伝道が普及するに伴い、各地で建設された主要な教会堂は、ほとんどがロマネスクあるいはゴシック様式を基調としたものである。その意味で、上記の和風キリスト教会建築はきわめて特異な存在である。

### § 3. 奈良基督教会における和風意匠の検討

#### 3.1 建設経過

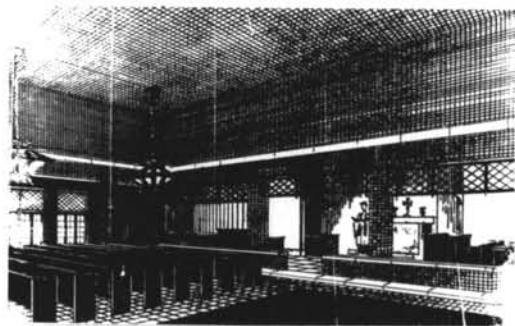
奈良基督教会は、明治18年3月に大阪在住の米国聖公会宣教師マキムが伝道者を派遣したのがはじまりとされている。当初は一般の居宅を借りて説教所とし、既存の日本家屋を転々としていた。以後、明治20年、35年、大正元年に新築・移転を繰り返した



図一 奈良基督教会・周辺地図  
（『奈良公園史』昭和54年より）

が、一代から三代までの教会堂は、費用、工期からみても永続的なものではなく、土地所有も流動的であったが、いずれも簡素ながら洋風であり、和風を目指したものではなかった。

明治42年、もと興福寺境内西南一画の1600余坪を教会堂建設用地として、大阪の所有者から購入していたが<sup>10)</sup>、本格的に建設準備をはじめるのは大正に入ってからである。大正8年、教会予定地に桐の苗木7000本が植えられた。教会建設の際の資材にしようという目論見であった。実際に、この桐で教会堂の欄間は製作された。当時、奈良地区の教会を所轄する京都地方部の主教タッカーは、当時は各地の教会の教会堂や会館、牧師館の新築や敷地購入のための案件処理が多かったと回想し<sup>11)</sup>、日本国内はもちろん、帰米の際にも寄付金集めに奔走していた。大正11年、米国聖公会内外伝道局創立百年記念事業として記念教会堂を建設する伝道区の一つに日本も決まり、その一環として奈良基督教会建設にも多額の寄付が確定した。タッカーは、米国人建築家バウタを伴って敷地を検分、教会側と談合の上、設計試案をつくったが<sup>12)</sup>、日本人牧師らの賛成は得られなかった。タッカーは、土地購入や教会建設の中でもとりわけ興味深く思い出に残っているのが、奈良基督教会の建設計画だったと述べ「奈良市は特定の地域では日本式の建物しか建ててはならないという規則を制定していた<sup>13)</sup>、（教会堂敷地はこの特定地域内にあるので／訳注）教会堂建築に仏教あるいは神道の建築様式を採用する試みを実施する好機であった。若い米国人建築家バウタ（Bouta）による仏教寺院風の図面は、年配の宣教師たちにはいささか急進的であった。」と回想している<sup>11)</sup>。後述の大木吉太郎旧蔵のアルバムには『タッカー先生の案』と記した内観スケッチ（図一2）があるが、急



図二 奈良基督教会・設計案『タッカー先生の案』  
（大木吉太郎旧蔵）

進的な仏教式とはいいがたい。続いて「そこで神道式に変更して設計案を練り直し、ついに年配の宣教師たちと市当局の認可を得た」とある<sup>11)</sup>。彼は大正12年2月に京都地方部を辞任し6月には帰米するので、これは後年知った情報によるものであろう。また、日本建築の専門知識のない彼には奈良や京都で見慣れた仏寺とはあきらかに異なる実施案を神道式に思えたのだろうか。

次いで上林敬吉（東京）と大木吉太郎（奈良）の2名が設計したが、共にゴシック風の洋式建築であったので、興福寺の南円堂、北円堂、三重塔などの国宝建造物に隣接する関係上、風致を損なうとの理由で、県社寺課の建築許可を得られなかった<sup>12)</sup>。これらの図面は現存せず、その内容を知ることはできない。

上林敬吉（明治22年～昭和46年）はガーディナー事務所のスタッフで、大正14年11月のガーディナーの死後も暫くガーディナー事務所の名称のままでガーディナーの生前からの仕事を継続した後、上林建築事務所に改称した。すでに病床にあったガーディナーに代わって打合わせに来ていた上林の名が奈良の教会関係者には記憶されたのであろうか。

一方、大木吉太郎（明治20年～昭和46年）は大和郡山藩の棟梁の出身で、十代中頃から奈良で古社寺修理の現場で修行をし、明治末期に上京して日本工芸学校で建築を学んだ。卒業後、三越本店（大正3年）の現場等、東京でしばらく新築工事現場の実務についたが<sup>14)</sup>、大正中頃には奈良に戻り、奈良県や周辺地区の古社寺保存修理工事に従事していた<sup>15)</sup>。聖公会信徒の知人の協力と推薦があつて、赴任まもないニコルス主教との面談がかない、奈良基督教会の設計施工を請け負ったという。しかし、八十年史の記述によれば、すでにニコル赴任以前に設計に関与していた。

八十年史にはこのあたりの経過の年代が記されていないが、上林、大木の二案が出されたのは大正13年10月以前のことであろう。大正14年10月、タッカーの後任にニコルスが選ばれ翌年4月に着任した。ニコルスはガーディナーの娘婿で、京都主教在任中は上述の米国聖公会内外伝道局創立百年記念事業として京都地方部にもいくつかの教会堂が新築された時期にあたり、その建設の実施に関与したが、岳父の影響もあつてか情熱的にこれらを推進させた。先述の上林敬吉にもいくつかの教会堂と諸施設の設計を依頼している。「大木は県当局と折衝するうちに、純日本風で、大体奈良ホテルに準ずる建物ならば可とする当局の意向を確認したので、漸く今後の方針が決まり、新しい設計にとりかかった。そのためニコルス主教と吉村牧師とともに熊本の回春病院の建物を視察したが、参考になる点はほとんどなかった。やがて、県の諸条件を具備する日本建築様式の設計案を県に提出した。」<sup>12)</sup>回春病院の建物とは附属礼拝堂である熊本降臨教会（写真-6）のことである。これは、いわゆる仏教式でも神道式でもないという点では奈良基督教会と共通する。奈良県の行政文書には提出書類と図面は残されておらず、教会側にある図面にも日付は記されていないので、提出した時期と内容は明らかではないが、ニコルス着任後の大正14年中頃であろう。大正14年3月に東京帝国大学建築学科を卒業した元田稔の卒業論文『教会建築』<sup>16)</sup>には、奈良基督教会の和風意匠に言及した記述があり、これがタッカーが依頼したパウタ案か大木案か明らかではないが、タッカー案の内観スケッチを見る限り記述の内容と合致しないので、大木案についての記述であろうと思われる。彼は日本聖公会最初の邦人主教として知られる元田作之進の長男で、当時立教大学の理事長であつた父親から、聖公会の最新情報を入手できる立場にあつたので、申請以前に



写真一 奈良基督教会・外観  
(奈良基督教会所蔵)



写真二 奈良基督教会・玄関 右は興福寺三重塔  
(日本聖公会京都教区資料室所蔵)

計画図面のあらましを知ることができたのであろう。

申請から1年余り後、昭和2年10月には条件付きで建築許可を得た。条件とは、興福寺の三重塔から最短距離30m以上、南円堂から60m以上、北円堂から80m以上離すこと、屋根棟の高さは9mを超えないこと、建物の周囲5ヶ所に防火栓を設置することという内容であった。このような制限のもとに敷地内での建物の位置を決め、着工した。翌3年1月、遺形を組んだ頃に、米国聖公会内外伝道局々長らの新教会堂予定地の現地視察があり、正式な承認を得た。大木は費用節減のため周到な計画を立てて吉野の山林から用材の立木買いをした。建設に従事した中には、大正13年まで大木とともに和歌山市の旧官弊大社日前神社の修復工事にあたっていた職人たちもいた。大木らは採算度外視で普請にあたり、宣教師が日曜日は安息日なので休むように迫ったのに対し、ストライキを行って抗議し、休日返上で働いた。竣工後、ニコルスは予算内で竣工した事はないと称賛した。3年7月、ニコルスの司式で定礎式が行われた。(写真-3)。4年12月には会館(現在幼稚園)が落成、5年3月に教会堂が完成、同年4月に聖別式が行われた。聖別式の様子は、聖公会の基督週報だけでなく毎日新聞等の当時の一般誌にも報道された。

なお、建物の設計に直接携わっていないが、教会建設準備から完成にいたるまで、当時奈良帝室博物館長の久保田鼎<sup>17)</sup>の助言と協力があったことは見逃せない。彼は信徒ではなかったが、奈良基督教会青年会長を努めるなど、教会活動を支援していた。特に聖卓や聖器等の基督教に関する調度・備品の伝統的な意匠決定と製作には、同官技術員の吉田包春による正倉院御物を模したデザインを用いるなど、大きな役割を果たした。教会の新築全般にわたる美術工芸的な側面の助言と参考資料の提供があったこ



写真-3 奈良基督教会・定礎式  
(日本聖公会京都教区資料室所蔵)

とは容易に推察される。

### 3.2 建物概要

新築設計図、建設工事図、新築竣工図の3種類の図面があるが、いずれも日付は記されていない。当然のことながら新築竣工図が現状にほぼ合致するが、新築設計図、建設工事図から大きな変更は見い出せない。

木造平家建、建坪101坪の会堂と78.8坪の会館を雁行させて配し、渡り廊下で繋ぐ。会堂は全長91尺、最大梁間58.5尺、柱間は13尺を基本とする。北に内陣=チャネルを置き、外陣が南に延びる。外陣の幅39尺、長さ65尺、三廊式で、身廊幅26尺、側廊幅各6.5尺、列柱で区画する。外陣南端の東側に聖洗所、西側に昇降口=玄関を張り出して設け、正面性は強調されない。内陣は幅、奥行とも26尺で、前半を聖歌隊席、奥半分を聖壇とする。聖歌隊席の東側に控室=ベストリーを張り出して設け、外陣の西側北端に控室、会館へ通ずる渡廊下が続く。内部はいわゆるバシリカ形式に沿った三廊式だが、内陣の構成は床の間を想起させる。外陣の身廊と側廊を区画する列柱は角柱で、内陣では円柱とし、柱間は吹き放して、欄間を付け、長押を廻し、柱頂部には舟肘木を入れる。天井は格天井で鏡板も細かい格子である。側廊の窓=トリフォーラム、高窓=クリアストーリーも和風建具で、欄間や建具の意匠は直線的な幾何学紋様を基調とし、全体に装飾を抑えた意匠である。説教台、聖書台、椅子等の家具の意匠も和風を基調とし装飾を控えた簡素な意匠である。

39尺の梁間に架かる小屋は基本的には真東洋小屋組だが、大梁上に小梁を載せて束を立て、拮木を入れるなど、和小屋を併用し、桁行方向と南端妻部分を鉄骨で補強している。高さ制限いっぱいまで高くなった会堂は、瓦葺の大屋根の下に銅板葺の庇を廻し、

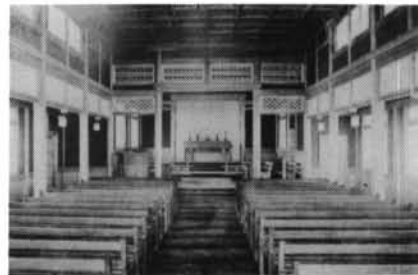
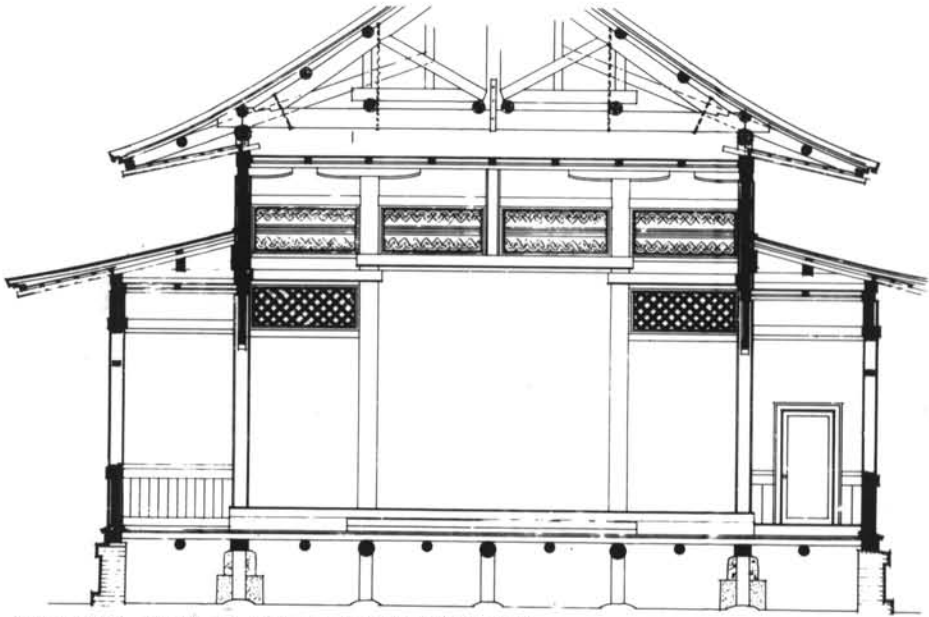
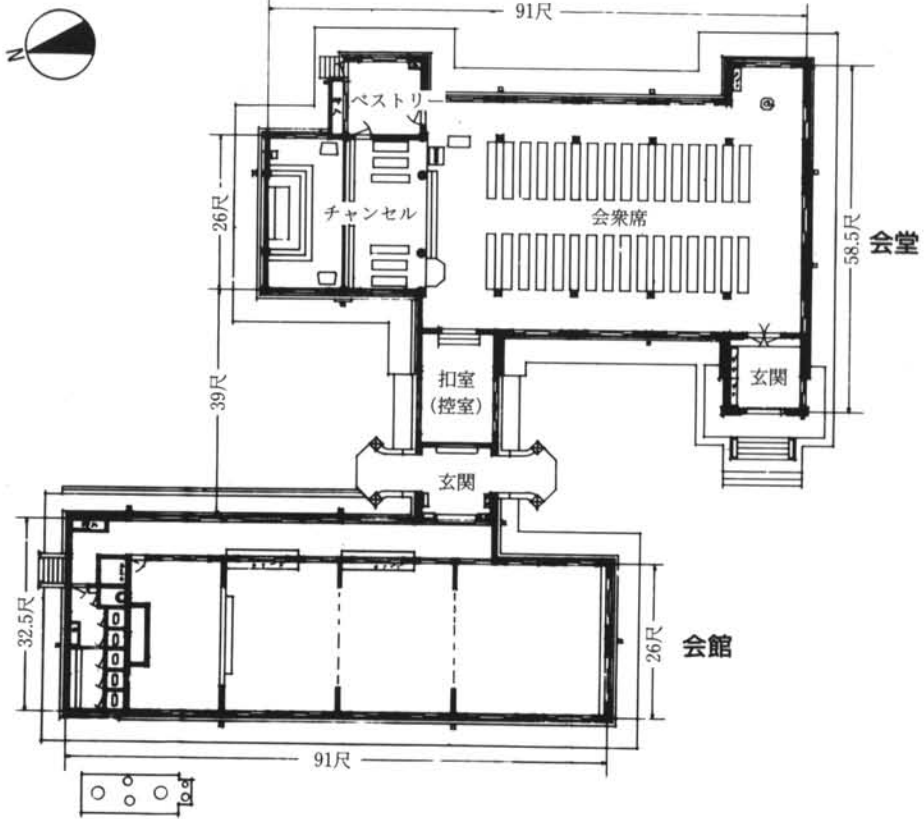


写真-4 奈良基督教会・内部  
(日本聖公会京都教区資料室所蔵)



図—3 奈良基督教会・梁行断面図（日本聖公会京都教区資料室所蔵）



図—4 奈良基督教会・平面図（日本聖公会京都教区資料室所蔵）

平家だが2層のように見える。外観を特徴づけるのは屋根の構成である。撞木型の大屋根の入母屋破風が三方に向かい、昇降口、聖洗所、控室の屋根の千鳥破風が庇の連続を遮るように張り出す。これに会堂と共通の意匠だが、会堂より少し低い入母屋造の会館が雁行して接続する。大棟、降り棟、隅棟は、本葎や棟込を施さず、単純に鬨斗を積み、大鬼、隅鬼とも数珠掛型で各々にマルタ十字と鳩に花紋をあしらった装飾を刻み、鳥伏間の先にもマルタ十字を刻む。玄関の棟先、大棟の撞木交差部と南端近くに、雲型の足を付けたラテン十字を載せる。



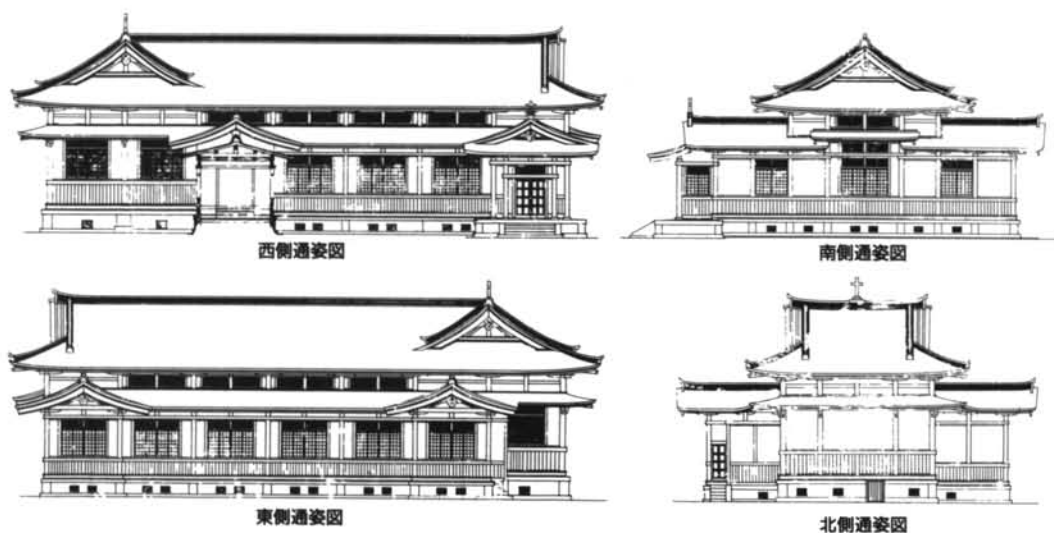
写真一五 奈良基督教会・鬼瓦  
(日本聖公会奈良基督教会所蔵)

### 3.3 和風意匠の採用

奈良基督教会が和風建築を採用したのは、奈良公園内の建物新築に関する県の規制と指導による。しかし、敷地を変更して洋風の教会堂を建設することも可能であったはずであるが、大正8年には桐を植え、10年には旧教会の土地家屋を売却して新教会建設資金にあてるなど、変更は全く検討されていない。購入時、まとまった広い土地を適正な立地、価格で得ることは希だと判断し、借金までして入手しており、立地に固執したわけではないが、とりわけ奈良的な一画に土地を購入した段階で、仏都奈良でも有数の名所に隣接してキリスト教会を建設するという、ある種の挑戦的な意図が芽生えたのかもしれないが、推察の域を出ない。タッカーは、バウタによる和風の計画案が、日本人の教会関係者に受け入れられな

かったことを残念に思うニュアンスで述べており<sup>11)</sup>、さらに大正七年に、日本建築の様式で建設された和歌山県の田辺教会に感動し、以後日本人の祈りの場としては、正統な洋風建築をよしとし仏教式あるいは神道式の建築をよしとしないのはどうかと思うようになったと回想している<sup>11)</sup>。県の規制によるだけでなく、日本の教会には和風がふさわしいというタッカーの積極的な賛成が、建設準備当初から背景にあったことは確かだが、彼の思い描く和風教会は必ずしも具体的なものではなかった。

設計者の大木は若い頃から古社寺修理に従事し、関野貞や天沼俊一らの知遇を得ていたと伝えられ<sup>18)</sup>、古建築に関する相当の理解と技量を持っていた。加えて奈良には古代からの優れた社寺建築が多く、さらに奈良公園には奈良県庁舎及び県会議事堂(明治



図一五 奈良基督教会・立面図(日本聖公会京都教区資料室所蔵)

27年・長野宇平治設計)、奈良県物産陳列所(明治35年・関野貞設計)、奈良ホテル(明治42年・長野片岡事務所)などの近代和風建築の事例に事欠かなかった。また大木は天理教本部の建設に関与しており<sup>19)</sup>、これらが直接間接に影響したと思われる。日本の代表的な宗教建築である寺院や神社の様式を直接的に採用せず、もっと広い意味での和風建築、和風意匠を、より深い理解に基づいて教会堂建築に用いており、外観内観とも、日本の伝統的な空間構成の枠組の範囲で、キリスト教会堂としての厳肅な空間を創出することに成功している。

#### § 4. 和風教会堂の評価

大正14年の元田稔の卒業論には『奈良の聖公会の会堂は確か新しい様式を勇敢に表している。その姿は古代日本に於ける社寺建築と同じ方向に向かった近代式教会建築である。之に対する批難(ママ)は色々あるであろうが、少なくとも将来我が国民性にぴったり適合する正しい型の建築の生まれ出る動機を与えるものであろう』とある。論文の大半は欧米の教会建築に関する一般論と建築計画的な視点からの説明に終始し、最後の章で日本の教会建築について数例を挙げ、それぞれわずかにコメントしている。その中で、和風の奈良基督教会を日本における教会建築の今後の一つの在り方を示すものとして評価しているのであるが、やや唐突に一事例として述べるにとどまり、評価の根拠も論点も示していない。タッカーと親しかった父親から肯定的な先入観をもって奈良基督教会について聞かされたと仮定すれば、この唐突さにうなずけないでもないが、当時聖公会の邦人聖職者の頂点にあった元田作之進が和風教会を積極的に評価したとは考えにくい。文面からも和風教会に対する非難が多いであろうことが察せられる。後述のように大学建築では和風を拒絶しながらも、特例として奈良基督教会のみをよしとしたのであろうか、あるいは和風教会については邦人幹部の一部に賛成派があったのであろうか、判然としない。ちなみに元田稔の卒業設計「大聖堂」は典型的なゴシック様式であり、卒業後、彼は東京市、川崎市、海軍省などを経て、戦後元田建築事務所を開設し、多くの教会を手がけたが、和風のきわだつ設計していない。

聖路加病院等の設計で知られるバーガミニ

(John Van Wie Bergamini, 明治21年~昭和50年)は、『日本のキリスト教建築』<sup>20)</sup>という一文で、地方の小さな村のピクチュアレスな堂宇から法隆寺に至るまで、日本の伝統的宗教建築を高く評価し、こうした建築遺産を日本のキリスト教建築の原点とするのが適切であるとする者が少ないことを嘆き、多くの日本人聖職者は、このような堂宇は仏教の礼拝と密接に関連しておりキリスト教の聖堂には適さないと考え、ゴシック様式を好む傾向にあると指摘している。「奈良のミッションの敷地は、古い名建築が点在する美しい奈良公園に隣接しており、奈良県から教会堂と会館を和風で建てるように要請された。ニコルス監督のもと、同教会の信徒で棟梁(contractor)の大木さんが設計工事を請負い、きわめて魅力的なこの教会と会館を完成させた。教会は黒の瓦葺で、漆喰壁と木の見事な内装で、木部は自然の色のままに磨きぬかれ、私には充分満足のいくものであった。」彦根の教会は、スミス長老が設計した興味深い小さな礼拝堂である。私はこの他に一、二の和風教会の事例を知るだけであるが、特に、熊本の大分病院の礼拝堂は、魅力的で簡素なものである。」と和風教会堂を称賛し、最後に「日本におけるキリスト教会堂建築は、今、大きな展開の『前夜=イヴ』にきているのかもしれない。」と述べている。さらに後年、その国の伝統や文化を重視し中国では聖アンドレ教会等の多くの中国式の建築を設計したとアジアでの活動を回顧している<sup>21)</sup>。しかし、日本における彼の作品数は少なく、日本建築様式を意欲的に取り入れた作品は見られない。

タッカーは前述のように和風の採用を積極的に評価していた。立教大学の新築にあたっては、明治44年に同大総理だった彼が無償で依頼した米国の有名な建築家クラム(Radlph Adams Cram, 文久3年~昭和17年)による日本式建築の新築案を、日本の教会関係者が強く拒絶し、洋風一点張りの主張をすることに納得しかねていた<sup>11)</sup>。今のところ、クラムの提案した日本式建築の図面を発見できていないので、当時彼らの認識する『日本様式』がどのようなものであったかは不明である。結局、立教大学は日本人の望むカレッジ・ゴシックの様式で建てることになり<sup>11)</sup>、マーフィ&ダナ(Murphy & Dana)によるチューダー風の建築となった。マーフィらは中国では同時期に、中国様式を折衷した『中国復興式建築』のミッション系大学を10棟余り設計している<sup>22)</sup>。ミッション建築において日本様

式が隆盛しないのは日本側教会関係者の洋風建築への強い志向によるものと考えられるが、もし日本式建築が認可されたとして、果たしてどのように日本建築を解説してどのような日本式の建築を設計し得たのか、興味のあるところではある。ちなみに、日本における聖公会のミッション・アーキテクトだったガーディナーは、わずかに障子戸や竹簀子の天井を教会建築に採用するにとどまり<sup>23)</sup>、ゴシックを基本としている。また住宅建築は、日光の自邸をのぞけば概ね洋式であり、洋館内の和室あるいは別棟の和館は日本人建築家大島盈株に分担する場合もあった<sup>24)</sup>。

## § 5. まとめ

『和風』を際立たせているのは、外観では、瓦葺の大屋根、千鳥破風、唐破風、それらにともなう懸魚や蓑又等のディテール、白壁、真壁のような木骨、引違の窓、菱格子、堅格子等である。内部では、床の間風の内陣の構成、柱、長押、欄間、格天井等である。さらに、こうした伝統的な細部の扱いや部材寸法と、柱間や天井高、軒高、棟高といった全体の規模と均衡のとれたプロポーションが、伝統的に洗練された空間としての成否を決めると考えられる。

本稿では検討しなかったが、熊本降臨教会、彦根聖愛教会等の外国人宣教師による設計の教会は、伝統的な記号やキリスト教的な図象をちりばめたものの、プロポーションの点でやや破綻をきたしている。大木の場合、気負いなく自然に、伝統的な意匠を当時の一般的な現代建築の枠組の中で再構成されており、全く破綻はない。前章で述べたように、彼が和洋の基本的デザインを習得していたことに加えて、

周囲に優れた手本がいくつもあったことによるのであろう。

明治初期から御雇外国人による皮相的な和風建築案<sup>25)</sup>はあったが、いずれも『和三洋七の奇図』『赤毛の島田髷』と、日本人には不評で採用されなかった。一方、明治後半から、日本人建築家による日本の伝統様式への取組み、すなわち西洋建築とも近世までの伝統建築とも異なる近代の日本建築の模索がはじめられ<sup>26)</sup>、近代日本の建築様式のあり方も議論されるようになった<sup>27)</sup>。こうした近代を経た建築家による近代和風の試みがなされたのは、本来の神社建築、博物館、官衙、ホテルといった建物であってキリスト教の諸施設ではなかった。

和風教会堂は地方都市の小規模な教会でのきわめて限られた試みにとどまり、ほとんど普及しなかった。それは、当時の日本人関係者たちの強い西洋志向に妨げられたからである。彼らのなかにはキリスト教の背後にある『西洋』への憧れから信徒となった者も少なくなく、彼らにとって教会は小さな外国だったのであろう。和風教会堂にすれば信徒が増加するとは考えられなかったし、事実そういう記録もない。設計した外国人宣教師たちも和風が布教拡大の手段とは考えておらず、日本におけるキリスト教を追求した結果の和風教会堂であった。建築家でなかった彼らは、バーガミニやマーフィらが歴史主義に基づく発想でいう、その国の伝統様式を採用する建築を目指したわけでもなかった。彼らとて、主張する理論と実践とが必ずしも一致していたわけではない。

ここでは、昭和初期における和風建築の一断面としての事例報告にとどめるが、和風教会堂が近代和風の流れの中でも、特異な存在として無視できないことは確かである。



写真一六 熊本降臨教会・正面外観  
(リデル・ライト記念老人ホーム資料室所蔵)



写真一七 彦根聖愛教会・正面外観  
(宮川庄助旧蔵)



注)

- 1) 「和風」の定義については、学術的に特に厳密に定められているわけではない。本稿では、日本の伝統的建築様式をふまえた意匠という程度の意味で用いている。さらにいえば、「和風」あるいは「近代和風」の史的意味をより明らかにするための研究の一環として本稿は位置づけられる。
- 2) 大阪府南蛮美術館、サントリー美術館、神戸市立博物館、長崎県立美術館等所蔵の南蛮屏風
- 3) 「上杉本格中洛外園屏風」(米沢市所蔵)の教会
- 4) 「扇面南蛮屏風」(神戸市立博物館所蔵)の南蛮寺
- 5) 宮元健次：「日本イエズス会礼法指針」第七章について。日本建築学会計画系論文報告集、第423号(1991年)
- 6) 横浜天主堂(文久2/1862年)、大浦天主堂(元治1/1864年)
- 7) 旧石巻教会(明治13年)、江袋教会(明治15年)、市川教会(明治30年)等
- 8) 大濱徹也：「明治キリスト教会史の研究」岩波書店(昭和54年)
- 9) 塚田理：「日本聖公会の形成と課題」聖公会出版(昭和53年)
- 10) 「明治四四年度在日本エビスコパル宣教師社団年報」によれば、奈良市登大路町四四～四六番地の都合四反九畝二〇歩を明治41年12月に所有権設定している。
- 11) Henry St. George Tucker "THE EXPLORING THE SILENT SHORE OF MEMORY" Whitter & Shepperson, (1951)
- 12) 日本聖公会奈良基督教会編「奈良基督教会八十年史」奈良基督教会(昭和41年)
- 13) 奈良公園は県の所轄であり、明治五年公布の奈良県令第八号「奈良公園ノ隣接地域へ家屋其他工作物新築改築大修繕ニ関スル願出ノ件」には「公園ニ治ヒタル地域ノ上ニ家屋其他ノ工作物ヲ新築改築又ハ大修繕セントスル者ハ其設計書図面等ヲ添へ当庁へ願出テ認可ヲ受クベシ。前項ノ規定ニ違反スルトキハ其工作物ノ工事ノ停止改築除去ヲ命スル事アルヘシ」とあるが、「和風」を具体的に規定しているわけではない。この県令は昭和12年の奈良都市計画風致地区規則に公布にともない廃止された。(奈良公園史編集委員会編「奈良公園史」昭和57年)
- 14) 大木吉太郎旧蔵アルバム。三越本店は横河工務所の設計監理だが同所の所員であったかどうかははっきりしていない。
- 15) 大木吉太郎旧蔵アルバム。奈良県に正式に採用されたか否かは定かではないが、当時の修理現場における人物写真の説明には、自分の肩書を「技手」と記している。
- 16) 大正14年3月12日提出(東京大学工学部建築学教室所蔵)
- 17) 久保田は明治22年の帝国博物館の設置とほぼ同時に九鬼総長の片腕として主事を務め、その後京都と奈良の皇室博物館長を兼任し、大正13年からは奈良皇室博物館長の専任となった。
- 18) 関野貞の奈良在任は明治29年～34年、天沼俊一の奈良在任は明治36年～大正9年。しかし両者とも古社寺の調査保存に関わる役職を晩年まで歴任しているので、明治30年代に奈良の古社寺保存現場で出会う可能性はある。
- 19) 大木吉太郎の遺族、大木謙一氏による。
- 20) "The Spirit of Missions", The Domestic and Foreign Missionary of Protestant Episcopal Church, 1938.7.
- 21) "Forth", The Domestic and Foreign Missionary of Protestant Episcopal Church, 1946. 4.
- 22) 村松伸「二十世紀初期中国における『中国建築の復興』と西洋人建築家」稲垣栄三先生還暦記念論集刊行会「建築史論叢」中央公論美術出版(昭和63年)
- 23) 日光変容貌教会(明治32年)、水戸聖ステファノ教会(明治38年)、京都聖約翰教会(明治40年)
- 24) 村井吉兵衛京都別邸(明治42年)、村井吉兵衛本邸(明治45年)、小田良治邸等
- 25) 開成学校校案(明治8年、レスカス)、裁判所案(明治20年、エンテ&ベックマン)、東京駅案(明治36年、フランツ・バルファー)等
- 26) 奈良県庁舎(明治28年、長野宇平治)、平安神宮(明治28年、伊東忠太)、明治神宮宝物殿(大正10年、大江新太郎)等
- 27) 明治43年、議事堂コンペの一環として行われた「我が国将来の建築を如何にすべき哉」の討論会では、日本独自の様式を追求すべき、あくまでも欧羅巴建築とすべき、歴史主義的様式から脱却すべき等の意見が出された。

<参考文献>

日本聖公会奈良基督教会編『奈良基督教会創立百周年記念誌』奈良基督教会刊（昭和62年）

『奈良基督教会建築精算報告』日本聖公会京都教区資料室所蔵（昭和7年）

京都地方部教務局総務部編『日本聖公会京都地方部歴史編纂資料』日本聖公会京都教区資料室所蔵（昭和12年）

『在日本エビスコバル宣教師社団年報』日本聖公会京都教区資料室所蔵（大正6～昭和12年）

藤原恵洋『日本近代建築における和風意匠の歴史的研究』私家版（昭和62年）